

# 初地即極説における第二地解釈の伝承と展開

——東密の『瑜祇經』註疏類を中心に——

大 鹿 眞 央

古來、密教の行位論は「豎（竪）」と「横」といった二種の観点から語られることが多い。「豎」とは、時間の遅速に関わらず、行位の階梯を踏むことが前提とされる解釈であり、「横」とは、平等の観点に立つて当位をそのまま目的地（到達すべき位）と同等に見る解釈を指す。

東密の行位論において、代表的な教説とも言える「初地即極説」とは「初地の悉地と仏果位の悉地を同等に見る」といった「横」の思想を指す。平安末期より初地即極説が敷衍するに随って、議論は行位論のみならず、機根論や妄執論とも相俟って、複雑な様相を呈するようになっていく。その中で、第二地以上の階梯が如何なる意義を持つのかといった問題も重視されるようになっていった。

まず、本論の前提として、ごく初期の初地即極説と考えられる記述を確認する。以下に挙げるのは、醍醐寺第十七世の実運（一一〇五—一一六〇）撰『瑜祇經秘決』（以下、『秘決』）における『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經』（以下、『瑜祇經』）大勝

金剛心三昧耶品第八（以下、第八品）の大意を説明した箇所である。

上品中、明<sup>二</sup>本有金剛薩埵初地自証究竟真実頓極滿至極妙理<sup>一</sup>。当品中、説<sup>二</sup>第二地修生薩埵果仏報身相<sup>一</sup>。今宗意者、初地・二地外更無<sup>三</sup>位地<sup>一</sup>。自証ノ極。以前行、皆摂<sup>レ</sup>此<sup>二</sup>地<sup>一</sup>、化他ノ初。以後位、皆摂<sup>レ</sup>此<sup>二</sup>地<sup>一</sup>。故<sup>二</sup>二地外不<sup>レ</sup>説<sup>二</sup>二地已上之仏<sup>一</sup>也。

右の文章で、実運は『瑜祇經』第七品・第八品の大意の解釈に初地即極説を導入している。実運は上品（第七品）について本有の金剛薩埵が初地自証の妙理を明かす章であるとし、当品（第八品）については第二地の修生の薩埵が果仏報身の相貌を説く章と解釈する。これは第七品で障者即ち金剛薩埵が説法し終えるとともに解脱・消失したことを承けて自証の極と表現したのであり、次の第八品で遍照薄伽梵（大勝金剛<sup>2</sup>）が十二臂それぞれに五峯金剛・蓮花・摩尼・羯磨・鉤・索・鎖・鈴等の持物を具し、千葉の大白蓮華に住して四

初地即極説における第二地解釈の伝承と展開（大鹿）

撰菩薩（中尊大日の化他を司る菩薩たち）の明呪を説くことを果  
仏報身の相と表現したものと考えられる。右の文中で最も注  
目すべきは、「今宗意」即ち真言宗の本意として、初地は自  
証の極であるため、それ以前の修行は全て初地に包摂され、  
第二地は化他の初であるため、以後の位地は全て第二地に包  
摂されると解釈した点である。つまり、実運は真言宗の位地  
を初地と第二地の二位のみに限定し、第三地以上の階梯を設  
定しないのである。

筆者はかつて、『秘決』のこの記述に着目し、後代の東密  
の論義に散見する「第二地の意義は化他の為」という教説の  
源流が『秘決』まで遡れることを発表した。<sup>(3)</sup> 本論では、平安  
末期以降の『瑜祇經』註疏類を中心に取り上げ、初地即極  
説、特に第二地の解釈に関して、後代の学匠たちが『秘決』  
の記述をどのように受用し、展開していったかに焦点を当て  
ていく。

最初に、金剛王院院主であり、実運と同じく醍醐寺座主も  
務めた実賢（一一七六—一二四九）が口述し、正智院道範  
（一二七八—一二五二）が筆記・加筆した『瑜祇經口決』（以下、  
『口決』）巻三における第八品の注釈箇所を以下に挙げる。

当品来意、上ノ瑜伽成就品、初地自証。金薩・愛染不二一字証位  
故。今大勝金剛、第二地果仏。撰三五部万徳<sup>一</sup>、坐三千葉白蓮一故。

今教、初地・二地外更無「位地」。初地、自証ノ極。以前行、皆撰  
此。二地、化他ノ初。以後位、皆撰レ此。故此二地外不レ説二地已  
上仏也。<sup>(4)</sup>

右の文章では、上の瑜伽成就品（第七品）は初地自証、今  
の大勝金剛品（第八品）は第二地の果仏、また、今教に初  
地・第二地の外に更に位地無し等と表現していることから、  
実賢・道範が実運の教説をほぼ踏襲していることが分かる。  
さらには、引用するのみならず、第七品に関しては、経中で  
障者即ち金剛薩埵が「愛染王の根本一字（卅字）を心に持せ  
ば、この障は速やかに除滅す」と述べた箇所を踏まえて「不  
二一字証位故」と表現し、第八品に関しては、「撰三五部万  
徳<sup>一</sup>、坐三千葉白蓮一故」と説明を付加している。

実は、道範の晩年の著作である『大日経疏遍明鈔』（以下、  
『遍明鈔』）を検討すると、「自宗初地、即自証円極。二地已  
上、為二果後ノ行果ノ方便一也」<sup>(5)</sup>や「自家十地、皆本有無始故  
無実行因人」。初地ニ頓証。二地以上為二果後化他一也」<sup>(6)</sup>と  
いった文が散見するため、道範自身も初地に自証円極し、第  
二地は化他の為にあると解釈していたことが分かる。しか  
し、留意するべきは、『遍明鈔』では「二地以上」と表現し、  
第三地以上の階梯を認めている点である。実運の教説を踏ま  
えながらも、道範自身は独自の解釈を付加していたと考えら

れる。ちなみに、後代の高野山無量光院の印融（二四三五一五一九）撰『杣保隱遁鈔』巻一「初地即極事」の段には、「遍明鈔二十云、（中略）此事深秘深秘也。論義座席不可<sub>レ</sub>出也。今所論定、難<sub>ニハ</sub>、初地分証、於<sub>ニ</sub>第十一地<sub>一</sub>自証・化他可<sub>レ</sub>滿<sub>云</sub>。答<sub>ニハ</sub>、初地滿<sub>ニ</sub>自証<sub>一</sub>、第十一地滿<sub>ニ</sub>化他正覺<sub>一</sub>云。」という記述があり、答者（道範）の主張を「第十一地に化他の正覺を滿ず」と紹介しているが、現存する『遍明鈔』本文にこのような記載はない。さらに付言すれば、初地即極説を基軸にして成仏論や妄執論等で自説を展開した道範が、行位の階梯を全十一地に設定していたのかも甚だ不審である。

次に、根来の学匠としても名高い中性院頼瑜（一二二六—一三〇四）の撰述した『瑜祇經拾古鈔』（以下、『拾古鈔』）巻中における『瑜祇經』第八品の大意を説明した箇所を抜粋する。

初来意者、前瑜伽成就品、是初地自証也。謂、金薩・愛染不二一字、証位故。今、大勝金剛品、即第二地化他也。謂、撰<sub>ニ</sub>五部万徳<sub>一</sub>、坐三千葉白蓮<sub>ニ</sub>故<sub>一</sub>。  
初地・二地有<sub>レ</sub>次。是来意也。<sup>(8)</sup>

右の記述が実賢・道範の『口決』の援用であることは論を俟たないが、細部に注意すると意図的な改変・抜抄がなされ

初地即極説における第二地解釈の伝承と展開（大鹿）

ていることに気づく。既に先行研究で山口史恭氏が指摘するように、頼瑜は『拾古鈔』において『口決』を度々引用するが、「或云<sub>範</sub>」と明記する場合と、明記しない場合とがある<sup>(9)</sup>。本箇所においても、出典元を明記せず、なおかつ意図的に援用している。『口決』の原文と相違する点は以下の三点である。最初に「第二地果仏」という元の表現を「第二地化他」に変更し、果得よりも化他を前面に押し出した点。次に「今教、初地・二地外更無<sub>ニ</sub>三位地<sub>一</sub>。」より後の初地即極説を示す文章を丸ごと削除している点。最後に、第八品の来意とは、初地の次に第二地があるという次第（順序）を示すことにあると説明を敢えて加えている点である。頼瑜が『瑜祇經』の教主解釈に関して道範を辛辣に批判したことは山口氏の研究<sup>(10)</sup>によつて既に指摘されるところであるが、実運の教説を承けて、道範が自説に応用した「初地即極説」に関しても、頼瑜は意図的に避けたように見受けられるのである<sup>(11)</sup>。しかし、大久保良峻氏の指摘するが如く、頼瑜の著作である『大日經疏指心鈔<sup>(13)</sup>』や『即身成仏義顯得鈔<sup>(14)</sup>』には、初地即極説を採用するような記述が見られるため、『拾古鈔』で初地即極説の記述を避けた理由について、また頼瑜が初地即極説をどう評価していたかについては、慎重に判断する必要がある。

ここで、頼瑜と同じく根来の学匠である聖憲（一二三〇—一三九二）の撰述した『大疏百条第三重』巻五「初地即極」

の論題における第三重の箇所を挙げて検討する。

又三妄斷位、初地見。是豈以<sup>レ</sup>初地<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>究竟成仏<sup>一</sup>乎。但至<sup>三</sup>疏家<sup>レ</sup>初地<sup>レ</sup>立<sup>二</sup>地位<sup>一</sup>淺深<sup>一</sup>者、可<sup>レ</sup>初地即極<sup>一</sup>道理分明<sup>レ</sup>、雖<sup>レ</sup>有<sup>三</sup>諸文<sup>一</sup>、悉可<sup>レ</sup>云<sup>二</sup>即順常途<sup>一</sup>也。

又於<sup>二</sup>今經<sup>一</sup>第三劫無量無數百千俱胝那由他劫乃至皆悉成就文<sup>一</sup>、疏家作<sup>二</sup>二<sup>一</sup>釈。一、余乘菩薩於<sup>二</sup>無數阿僧祇劫<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>集功德、真言行者於<sup>二</sup>初地位<sup>一</sup>云<sup>二</sup>頓具<sup>一</sup>足之<sup>一</sup>釈。一、云<sup>二</sup>真言行者於<sup>二</sup>二地已上<sup>一</sup>一經<sup>一</sup>無數阿僧祇劫<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>集功德智慧、於<sup>二</sup>初地位<sup>一</sup>悉成就<sup>一</sup>就<sup>二</sup>上<sup>一</sup>釈。

付<sup>二</sup>此後<sup>一</sup>釈「取<sup>二</sup>輪王太子喻<sup>一</sup>。既云<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>行<sup>一</sup>二地已上普賢衆行<sup>一</sup>、其功德智慧、初地悉得<sup>レ</sup>之。豈以<sup>二</sup>初地<sup>一</sup>非<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>自証円極位<sup>一</sup>乎。故知、二地已上普賢衆行者、果後方便也<sup>三</sup>云事<sup>一</sup>」。

右の文書を読むと、冒頭に、初地を以て究竟の成仏とみなす聖憲の結論が述べられ、さらには、疏家（『大日経疏』）は処々に地位の浅深を述べるが、初地即極であるべき道理は分明であるため、地位浅深を表す諸文があったとしても、それは「即ち常途に順ふ」、つまり、仮に顕教に倣った方便であると説明している。就中、注目すべきは『大日経』卷一の第三劫段における「無量無數百千俱胝那由他劫乃至皆悉成就」の文に関する疏家の二種の解釈、そして聖憲自身の見解である。そこに紹介される疏家の二釈における相異点は、無数阿僧祇劫を経るのが「余乗の行者」か、それとも「第二地以上の真言行者」か、といった点なのであるが、聖憲は後者に対

して、「二地已上の普賢衆行を行わずとも其の功德や智慧は、既に初地で悉く獲得できる」と説明する。つまり、「自証円極の位である初地に至れば、第二地以上の智慧・功德をそこで全て獲得できるため、第二地以上の行は仏果後の方便に過ぎない」と主張しているのである。これに酷似した教説は、道範の師である禅林寺静遍（一一六六—一二二四）にも見られるため、以下に、静遍口述『顕密二教論手鏡鈔』巻上の記述を挙げる。

法花廻心後、化他行未<sup>レ</sup>調故經<sup>二</sup>劫数<sup>一</sup>。化他未<sup>レ</sup>成故自証又未<sup>レ</sup>成。是故円人、必經<sup>二</sup>劫数<sup>一</sup>也。（中略）問。迂廻二乗為<sup>二</sup>化他<sup>一</sup>經<sup>二</sup>劫数<sup>一</sup>。以<sup>レ</sup>之為<sup>二</sup>一乘經劫之義<sup>一</sup>者、真言頓証行人又為<sup>二</sup>化他<sup>一</sup>或經<sup>二</sup>塵劫<sup>一</sup>、或常在<sup>二</sup>無間<sup>一</sup>。以<sup>レ</sup>之而言、真言又經劫成仏、如何。答。難幼稚。真言行者、一切頓極頓滿、無<sup>二</sup>分証<sup>一</sup>。是故初発心時、二利具足、五智円極。不<sup>レ</sup>捨<sup>二</sup>本誓<sup>一</sup>、所起応用、以<sup>二</sup>衆生無尽<sup>一</sup>故諸仏方便亦無<sup>二</sup>終尽<sup>一</sup>。即果後方便<sup>二</sup>示<sup>一</sup>現塵劫成仏等一切難思<sup>一</sup>、応迹<sup>二</sup>也。豈監<sup>二</sup>顕乘自行有三分証<sup>一</sup>化他有<sup>二</sup>待<sup>一</sup>時哉<sup>一</sup>。

右の文章で静遍は、法華円教は化他が未調・未成であるために自証も又未成であり、それ故に円教の人は必ず劫数を経ると主張する。それに対して、真言頓証の行人も化他の為に塵劫を経るか否かとの質問がなされると、真言行者は円教の行人と異なり、初発心時に自利・利他の二利が具足して五智も円極すると静遍は答えている。さらに、「果後の方便」と

いう語句について、塵劫成仏などの一切難思の応迹を示現することであると説明する点にも注目したい。つまり、静遍は、自他二利が初地で同時に具足することを前提にして、二地以上は衆生を済度する方便（応迹の示現）と定義するのである。

聖憲の論題の要点は「初地に獲得する正覚は、円満か一分か」という点にあるため、自利・利他といった観点で明確に論じられていないことに留意する必要があるが、それを踏まえても、静遍・道範を苛烈に批判する頼瑜の流れを汲む聖憲の教説に、静遍と共通する初地の解釈が発見できたことは非常に興味深い。

以上の検討の結果、第二地解釈は、以下のように伝承・展開したことが判明した。まず、初地即極説の最初期に位置すると考えられる実運は、真言宗の位地を初地と第二地の二位のみに限定し、第三地以上の階梯を設定しない。実賢・道範はそうした実運の教説をほぼ踏襲しながらも、道範は他の著作では「二地以上」と表現し、第三地以上の階梯を認める独自の解釈を付加していたと言えよう。こうした瑜祇経解釈の伝承の流れの中で、頼瑜は『秘決』・『口決』の文章を度々引用するが、初地即極説に関しては意図的に避けたように見受けられる。しかし、他の著作中では、初地即極説を示すような記述も見られるため、『拾古鈔』で初地即極説の記述を避

けた理由、また頼瑜が初地即極説をどう評価していたかは、慎重に判断する必要がある。また、道範の師である静遍と、頼瑜の流れを汲む聖憲に、「自証円極の位である初地に至れば、第二地以上の智慧・徳をそこで全て獲得できるため、第二地以上の行は仏果後の方便に過ぎない」という共通の主張があったことは非常に興味深い。今後の課題としては、頼瑜における初地即極説の評価について、また頼瑜と聖憲との教説の相違について検討していく予定である。

末筆ではあるが、大勝金剛や頼瑜の第二地解釈に関して、大正大学専任講師の佐々木大樹先生より貴重な御助言を頂いた。心より御礼申し上げる。

1 『秘決』巻下（真全五・二〇頁上）。

2 実運が大勝金剛を「修生薩埵」と表現した理由は不明である。「大勝金剛」の解釈には諸説あり、大勝金剛を金剛薩埵とする一説に関係しているか。『密教大辞典』『大勝金剛』の項には、頼瑜撰『秘鈔問答』第十大勝金剛の條に「大師の釈に十二臂現身とは金薩なりと。」の文ありと記載されているが、伝空海撰『一切如来大勝金剛頂最勝真実三昧耶品次第観念』（『瑜祇経行法記』とも呼ぶ、新版日藏、密教部章疏七）に該当する記述は見当たらない。

3 拙稿「中世東密教学における『瑜祇経』解釈の展開——実運撰『瑜祇経秘決』の果たした役割を中心に——」（『印度学仏教



初地即極説における第二地解釈の伝承と展開（大鹿）

学研究』第六三卷第一号、二〇一四）を参照。

4 『口決』卷三（真全五・七七頁下）。

5 『大日経疏遍明鈔』卷一九（統真全五・四一六頁上）。

6 『大日経疏遍明鈔』卷一（統真全五・一〇八頁上）。

7 『杣保隱遁鈔』卷一（真全二〇・一八九頁上）。

8 『拾古鈔』卷中（新版日藏、密教部章疏八・四四頁上）。

9 山口史恭氏は「頼璩は『拾古鈔』で「或云。<sup>範</sup>。」として道範をよく引用する。（中略）しかし管見では文の構成や引用文の重複などから、上中下巻全体をとおして名を挙げずに『口決』を意識しているであろう箇所が極めて多く、甚だしい場合はそのまま長文にわたって転写している箇所も少なくない。」（頼璩の思想形成における道範の位置——特に『瑜祇経』解釈を例にして——）『新義真言教学の研究』大蔵出版、二〇〇二、四四二頁）と指摘する。

10 前掲山口論文を参照。

11 根来の流れを汲む智積院動潮（一七〇九—一七九五）の撰述した『瑜祇経伝授手鑑』（智山全書九・五九二頁下）では、『拾古鈔』をそのまま引用するため、初地即極説を採用しない。その一方で、頼璩とは別の法統である靈雲寺の浄嚴（一六三九—一七〇二）の流れを汲む性寂（一一七一—）撰『祕密儀軌随聞記』卷二九（真全二・二四〇頁下）及び真常（一二二—一八〇二）撰『諸軌稟承録』（統真全三・五三五頁上）では、初地即極説を採用する。即ち、「第二地は化他の果仏」と定義し、『口決』の「初地・二地外更無三位地」の記述を引用して、初地・第二地の二位のみを階梯として設定するのである。

12 大久保良峻『大日経疏指心鈔』と台密』（『新義真言教学の

研究』所収、大蔵出版、二〇〇二／『最澄の思想と天台密教』法蔵館、二〇一五に再録）。

13 『大日経疏指心鈔』卷一二（大正五九・七五一頁中下）。

14 『即身成仏義顯得鈔』卷上（真全一三・一五頁上下）。

15 『大疏百条第三重』（大正七九・六七一頁中下）。

16 『大日経』卷一（大正一八・三頁中）。この文に関する背景や東密の解釈については、前掲大久保論文、また大久保『台密教学の研究』（法蔵館、二〇〇四）第一章『大日経義釈』の教学と受容』で詳論されている。

17 『顕密二教論手鏡鈔』卷上（統真全一八・二七八頁上）。

〈キーワード〉 初地即極、瑜祇経、実運、静遍、道範、頼璩、聖

憲

（大正大学専任講師）